「桜を見る～自分を見つめる」

●桜を見る

桜咲く頃となりました。東日本大震災の年も、昨年も、今年も、いずれの年も、同じ桜が春霞の中にきらめいています。しかも、去年とは違う桜を迎えました。

新型コロナウイルスの感染拡大、税金の私物化と批判される桜を見る会、公文書改ざんに関与させられた公務員の自死、学(がく)術(じゅつ)会(かい)議(ぎ)解事故、さらに、ロシアによる侵略というウクライナへの軍事侵攻などなど、様々な出来事が起きると、同じ桜でも私たちにはその見え方が変わります。

桜はかりではありません。自分の周りに起きる出来事は、その人のものの見方を変えていくともいえるでしょう。

初々しいいいのちが誕生した、老人の認知機(きの)能(う)が低下したり介護が必要になった、気づかぬうちに病状が進行していた、身近な人が息を引き取ったなど、思いもよらぬ出来事は、私たちの歩みを踏みとどめ、生(しょう)・老(ろう)・病(びょう)・死(し)の事実を見つめさせることになります。

そして、身近な人の思わぬ生・老・病・死は、改めて、今までの自分の生き方、暮らし方を問いにしてくれます。さらに、それは同時に、自分のものの見方を見つめるきっかけになります。

いつも見ているこもりのものを、改めて見直すということは、今まで見過ごしていたものの見方を悪まれる、あるいは、今まで気づいていなかったことに気づかされる、ということです。

しかも、周りの出来事に大きな影響を受けたからこそ、そのものが見えてきたということになります。さて、今年の桜は、どのように見えているでしょうか。

●ほとけはつねに

「仏は常に　いませども　うつつならぬぞ　あはれなる
人の音せぬ暁に　ほのかに夢に　見え給ふ」

これは、平安末期に色々な歌を編んだという「梁塵秘(ひ)抄(しょう)」の一首で、法文歌(ほうもんか)に分類されます。法文歌とは、文字通り、法文、仏法の味わいを文言、ここでは七五調の歌に詠んだものです。

ご案内の通り、親鸞聖人も、そうした歌を背景にして、数多くの「和讃」、たとえば、有名な「愚(ぐ)禿(とく)讃」などを遺されています。

「如来大悲の恩徳は　身を粉にしても　報ずべし
師主知識の恩徳も　骨をくだきても　謝ずべし」

さて、「梁塵秘抄」の第一句「仏は常にいませども」は、「法華経」の「如来寿量品」を元にしています。

法華経では、釈尊は永遠の寿命を持ち、その八十歳のご入滅は衆生救済のために示された方便にすぎないと明かされます。

ですから、お亡くなりになったといえども、釈尊は常にこの世に住し、ましまして、すべての人々を救おうと法を説いておられるというのです。これは、この世に苦悩する人がいるかぎり、仏の衆生救済のはたらきが続くことを、ここでは象徴的比喩的に「常にいます」と、表現されているわけです。

しかしいくらお経に、そう述べられていても、仏に会うことは容易ではありません。仏さま、如来さまに、どうしても会いたいのに、なかなか会えない深い悲しみを、この第二句に「現(うつつ)ならぬぞあわれなる(悲しいことである)」と示されます。

すなわち、現実に仏さまに会うことがなかなかできないけれども、人生に悩む多くの人々は、なんとか、仏に会い、苦しみを乗り越えて行くことを願ったわけであります。

当時、こういう切実な願いを持つ人々は、寺院などに夜通しのお籠(こも)りをして、夢を通じて仏に出会うことを期待しました。

「ほとけさまは、いつでもおいでになるのに、現実のお姿としては現れないのは悲しいことです」という表現が、とても趣きの深いことを表しています。

ところで、種々の記録によると、親鸞聖人（1173～1263）は、二十九歳の時に、京都の六角堂に、正月第(だい)百日間のお籠もりを始められ、やがて、九十五日目の明け方（当時、ひと月は三十日なので、四月五日）に、かつてこの六角堂をお立てになった聖徳太子（574～622）の夢のお告げを受けて、それまで、二十年の行と学を積んだ比叡山を下りて、法然聖人のもとに宗旨替えをされ、それからの人生を念仏ひとつとして選び取る専修念仏の生き方へ、大きく変えられることになったのは大変、有名なお話です。

さて、この今様の第三･四句では、夜を徹して祈り続けた後、人びとは、夜明けに、夢の中でほのかに仏を感得した場面が歌われています。それを、「ひと気のない暁に、かすかに夢に現れる(ような)ものです」と、表現されています。

現代に生きる我々にとっては、仏さまから教えを授かった夢を見たという話を聞いても、それを客観的にみて、神秘的で、特異な体験として、合理的で科学的な判断だけで受け止めてしまうことでしょう。

つまりそのことを通して、何かを考えるという、自分の心の深まりや、心の成長が伴うことがなかなかありません。しかし、当時の人は、自分たちが、仏を念じて生きているという一方向だけではなくて、その逆に、常に、私は仏に念じられている、仏は私に向かってはたらいてくださっているのだ、と実感して、それならば、なんとか仏に出遇い、教えを受けようと勤めたのは間違いありません。

●心が澄浄になること

さて、仏とは、すべての衆生の救済を誓い求めて、永遠にはたらき続ける智慧と慈悲を本質だと説かれています。

そうした仏さまの、智慧と慈悲がはたらき続けるのなら、今日も仏の救済に出会うこと、納得すること、いいかえれば、この私が救われることができるでしょう。

会ったことのない仏さま、さとりの世界との出遇いを表すときに、宗教では、象徴を通して伝えてきました。

仏教にご縁のある者は、仏さまという言葉を口にし、仏さまという名を当たり前のように聞いています。しかしながら、本当の仏さまが私に現れる、本当に仏さまに出遇うということは、とても有難いことで、つまり、滅多にあることではないでしょう。

親鸞聖人の教えを頂く者にとっては、仏さまと出遇うことを信心を開くともいいます。

信心とは、インドの原語では、チッタ･プラサーダといい、チッタ（心）がプラサーダ（澄浄）になることです。

今まで、濁っていたので気づかなかったけれど、澄んできたことで気づく心です。この場合の濁っていたものとは、インドの原語でいえば、クレーシャ（濁り）で、仏教の文献では、煩悩と訳される言葉です。煩悩というのは、自己中心の心のいとなみのことをいいます。その煩悩が、濁りとなって、本来あるものをさえぎって見えにくくさせているわけです。

いうまでもありませんが、仏教でいう信心、親鸞聖人の信心とは、「イワシの頭も信心から」というような、自分勝手な思い込みや、かたくなになって信じ込むような態度とは、まったく違う心のありかたです。

あえていうのならば、私たちが、本当に仏さまに出遇うのは、今まで見過ごしていたもの、気づいていなかったことに気づかされて、ああそうだったなあ、常に仏さまはいらっしゃるのに、この私は気づいていない生き方をしていたなあ、という実感を悪まれたところに成り立っていると言えるでしょう。

それは、今まで見えていなかった桜がこの私のいのちの上に見えてくる実感に似ているようにも思いました。

●この世のできごとは何事も念仏申す助縁

同じものが、その時その時、自分が体験することを通して、今まで気づかなかった深い尊いものとして見えてくる、知れてくるのならば、私にとって、仏さまに出遇うきっかけとなったものは何でしょうか。

身近な所でいえば、仏壇、本堂、名号（南無阿弥陀仏）、仏像、法座（お聴聞）、最近ならオンライン法話などです。ところが、ものの見方を変えてくれるのはそれば かりではありません。

冒頭に掲げた通り、今まで、無駄で、邪魔で、無価値で、無ければよいと思っていた出来事も、実は、私を気づかせるきっかけになっています。

多くの人にとって、家族との別れ、仕事の失敗･挫折、自分の老い･病･死などど、自分の思い通りにならない事実とのであいが、目覚めることのきっかけになることがあります。

さらに考えると、私が念仏を生活習慣として称える身に育てられていなかったならば、このような深い実感は生まれなかったでしょう。その時、苦しみ悩みも私を育てるものと気づきます。

「この世のできごとは　何事も何事も　お念仏の助縁とおもうべし」（故･信(しんの)空(くう)師(し)）

菜畿麿、元龍谷大学学長）（※助縁＝助けとなってくださるご縁）

という法話を改めて思いおこします。

そうすると今年の桜を見るという出来事も、お念仏を称える尊いご縁、助縁となります。お念仏を軸として、お念仏称えることにより、澄んでいく、気づかされる心の世界や生き方が悪まれます。

そこに先立っていた人びと、思い通りにならない出来事と改めて出遇いなおしが生まれているのではないでしょうか。

合掌

万行寺第十八世住職　釋静芳（本多 静芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で「親鸞様･御和讃」を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で「親鸞様･御手紙」を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。